

入選

テーマ：未来のための今を生きる
「たのしく生きなきや損」

NHK学園高等学校3年 成田 琴音

私は身体障害者だ。去年の年始めに突然難病に罹^り患^いし、今でもその後遺症と闘っている。何度も入院を繰り返す中で、今でも忘れられない出会いがあった。昨年の年の瀬、病院のリハビリ室で一人の女性に声をかけられた。名前はまみさん。私と同じ高校生。細身で大人びた後ろ姿とは裏腹に、屈託のない笑顔が特徴的で明るい印象を受けた。そんな彼女は末期の進行性胃がんを患っていた。そう、たちの悪いことで有名なスキルス性胃がんだ。余命宣告を受けた彼女自らが下した決断、それは治療拒否だった。

最期は家で過ごしたいという彼女の願いを叶えるべく念願の退院が決まった。彼女は、うれしそうに教えてくれた。きつと神様からのクリスマスプレゼントだねと、二人で笑顔になった。だけど、彼女の希望が現実になることはうれしくても、彼女にとっての退院は、すぐそこまで近づく死を意味するような気がして心から祝福できなかった。しかし数日が経ち彼女が退院し、気がつけばさびしさよりも彼女が無事に家へ帰れたことの安心感のほうがかはるかに大きかった。きつと私は、彼女の願いが叶うことに意味を見出したのだ。

それからどれくらい経っていたら。彼女のことをぼんやり考えていた私の携帯が鳴った。身に覚えのない番号、名前の表示もない。知らない番号には出てはいけないと幼いころ何度も言われたから、いつもなら出なかった。でも私は電話を受けた。相手はまみさんの母だった。優しい声、包み込むような温かみのある話し口調。それは私の知るまみさん、そのものだった。懐かしいと同時に、私の心は痛かった。なぜだろう。

私は甘えていた。まみさんの眩しい笑顔に死ぬわけないと勝手に思

い込み、死というつらい現実から目を背けていた。でも、その時はずっとすぐそこまで迫っていたのだ。もう彼女はこの世にいない。私が愚かなばかり気づくのが遅すぎた。思ったときには手遅れだった。最後にひと言、ありがとうと伝えていたら。悔やんでも悔やみきれない思いが、半年経った今も色褪せることなく私の体中を駆け巡る。

彼女の「死」は、私に大きな「生」をもたらしした。まみさんの分まで、まみさんのためにと思うと毎日を精一杯生きずにはいられなくなる。そんな生活が続き早半年、こんなにもまみさんという存在が今の私にとって大きな生きがいになっているのだと改めて実感する。

彼女と出会ったとき、私には悩みがあった。度重なる入院で全日制高校へ通うことが難しくなり、通信制高校への編入が決まった。新たな環境へ飛び込むことに不安を抱いていた。そんな私にまみさんがひと言、「たのしく生きなきや損」と言った。当時は無理だと思っていたのに、今では月に数回の登校日が待ち遠しくさえ感じている。たのしく生きること、それはまみさんが私にくれた生きる指標であり、まみさんが生きた証しそのものなのだ。

私の夢は教員になることだ。病気を経験した私にしかできない寄り添い方や子どものかかわり方がきつとあると思う。自分にしかできないことで社会に貢献したい。この思いの行き着く先が教育関係の職種だった。苦しむ子どもの存在に一人でも多く手を差し伸べたい。そして生きることの喜びやつらいことを乗り越えた先にある明るい未来へ導きたい。

出会いとは奇跡の連続だと思う。あの日同じリハビリ室にいたこと、まみさんが私に声をかけたこと、私が電話に出たこと、たくさんの奇跡が重なって今の私がある。だからこそ、身の周りに起こること、支えてくれる人、日常を当たり前と思わず感謝の気持ちをもって生きていきたい。それに、毎日が奇跡の連続だと思えば、今から起こる出来事や出会う人、その一つひとつに胸が高鳴るだろう。

なにせ、たのしく生きなきや損なのだから。